

研究課題	ICT 活用型協働学習拠点「つながる一む」の設置
副題	～復言語教育から芽生えた主体的学びを育むプラットフォームの開発に向けて～
キーワード	多言語教育、協働学習、主体的な学び
学校/団体名	公立奈良県立国際高等学校
所在地	〒631-0008 奈良県奈良市二名町1944番12
ホームページ	http://www.e-net.nara.jp/hs/kokusai/

1. 研究の背景

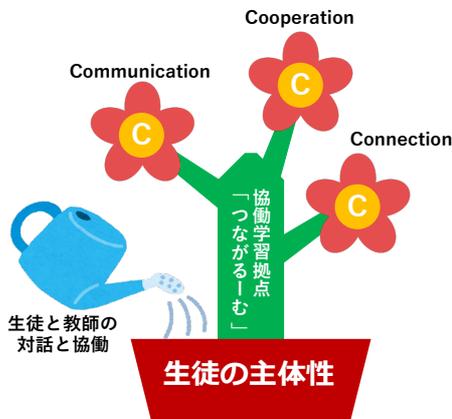
本校では過去2年間にわたり、パナソニック教育財団実践研究助成を受けてきた。2020年度は、5つの言語を学習する「世界の言語」において、生徒のメタ認知を喚起し、主体的に学習に取り組めるようなデジタルポートフォリオシステムの開発を行った。2021年度は、デジタルポートフォリオシステムを改良・発展させるとともに、遠隔コミュニケーションツールを用いて、オンライン国際交流を実施してきた。その結果、生徒が主体的に学習に取り組める環境の整備と、距離の制約を受けない国際交流のノウハウの蓄積ができた。興味深いことに、教員主導で行ってきたこのような取り組みを続ける中で、生徒から「世界の文化をもっと知りたい」、「世界中の人と繋がりたい」、「他の人と話し、考えを深めたい」などの要望が寄せられるようになった。実際に2021年12月には、「5ヶ国のクリスマス」というイベントが、生徒主導で行われた。このように、本研究で設置を目指す協働学習拠点「つながる一む」に関する精神的基盤はすでに醸成されており、助成を受け必要機器をそろえれば、研究が実施できる段階にあるといえる。

2. 研究の目的

本校では、複数の言語を学び世界の多様性の理解を目指す「世界の言語」、および、地域にある課題を手がかりとして地球規模の課題の解決を目指した「グローバル探究」を学校の中心に位置づけ、教育活動を行ってきた。開校以来2年間を経て、生徒から「世界の文化をもっと知りたい」、「世界中の人と繋がりたい」、「他の人と話し、考えを深めたい」など、主体的な学びにつながる要望が寄せられるようになった。そこで本研究では、生徒の主体的な学びを育むため、さまざまな ICT 機器を整備した協働学習拠点「つながる一む」を設置する。そしてこの「つながる一む」において、3つの「C」を整備し、発展させる。【Cooperation】生徒同士が助け合い、学びを深める環境を整備する。【Connection】遠隔会議システムを用いて、生徒が海外を含め多くの人と自由につながる環境を整備する。【Communication】生徒がお互いを尊重し、自由に議論できる環境を整備する。また、「つながる一む」の設置と運営は、教員と生徒が対話を通じておこなうことで、教員と生徒が協働する環境を構築する。

3. 研究の経過

「つながる一む」のコンセプトを以下の図に示す。



右図 協働学習拠点「つながる一む」の概念図

- ①2年間の活動によって、生徒の主体性が育まれた。
- ②この主体性をさらに成長させるために、協働学習拠点「つながる一む」を設置する。
- ③「つながる一む」の設置と運営は、生徒と教員が対話を通じておこなう。
- ④「つながる一む」では、3つの C (Communication、Cooperation、Connection) を整備し、発展させていく。

「つながる一む」の設置および「つながる一む」を用いた生徒および教員の活動について、以下に時系列に示す。

3月	「つながる一む」の整備
4月当初	「つながる一む」の開設 生徒との利用に関する話し合い
4月26日	生徒によるイベント『目指せ！グローバル人材！』実施 iPadに関する悩み相談など
5月	台湾嘉義高級中学校とのオンライン交流 日本メキシコ学院とのオンライン交流
5月27日	生徒によるイベント『デザイン講座』実施 プレゼンテーションに用いるスライドやポスターの作成について
6月	フランスサンテレーズ高校とのオンライン交流
6月～7月	高校生国際会議に向けた実行委員会打ち合わせ（県内の複数校が参加、一部オンライン参加）
9月	メキシコ ひまわり日本語学校とのオンライン交流
10月	ニュージーランド リットン高校とのオンライン交流 日本メキシコ学院とのオンライン交流
11月	ニュージーランド リットン高校とのオンライン交流
12月	フランスサンテレーズ高校とのオンライン交流 台湾嘉義高級中学校とのオンライン交流
12月14日	韓国文化体験
2月	メキシコ ひまわり日本語学校とのオンライン交流 ドイツ GJD 他2校のドイツの高校生とのオンライン交流

4. 代表的な実践

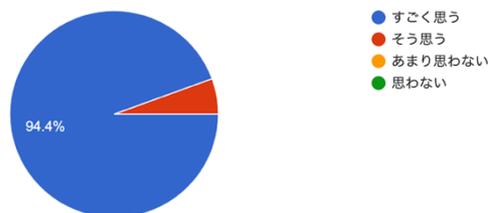
A) 生徒主体に実施した活動について

以下の活動を、生徒主体で実施した。

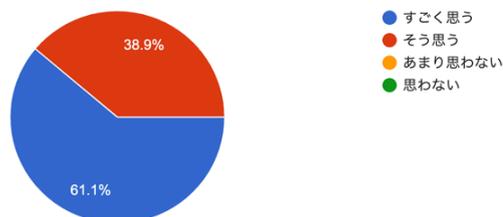
- 『目指せ！グローバル人材！』4月26日実施。iPadに関する悩み相談など2、3年生から1年生に対する悩み相談などの交流会。
- 『デザイン講座』5月27日実施。プレゼンテーションに用いるスライドやポスターの作成についての講義と実践。

参加者に行なったアンケート結果は以下の通りである。

つながる一むの雰囲気はよかったですか？



つながる一むにまた来ようと思いますか？



企画と実施に関わった生徒の感想を以下に示す。

- アンケート結果からもわかるように、つながる一むは利用してくれた生徒たちに少なからず良い影響を与えたのではないかと私たちは考える。私たちが始めた新たな活動であったため、利用者の反応は気になる部分ではあったが、私たちが行った講座や、空気感がたくさん国際生に伝わったのが最大の良い結果である。実際の声としても、「今日の学びを自分の学校生活に活かしていきたい」や、「先輩たちのリアルな声から学ぶことができるのは、安心できる」などといったポジティブな反応が多く、模索しながらも良い環境を提供することができてよかったと感じている。
- この探究活動を始める前、社会には高い語学力や積極性、コミュニケーション能力が必要であると考えていたが、国際高校での学校生活や探究活動を通して、そういった能力だけでなく今後の社会を自ら生き抜いていく力を得ることが必要であるということに気がつ

いた。グローバル化による影響は私たち学生にまできており、これらの変化には教育の改革は必要不可欠であり、私たちはその機会やチャンスを自ら掴む必要がある。

- つながる一むでのイベント実施後のアンケートや話し合いを通して、私たちが目指していた「スキルを伸ばすことができる環境にすること」、また「多様なバックグラウンドを身につける」この2つのスキルアップ、環境作りができていたと考える。しかしつながる一むには、様々な問題、課題がある。第1につながる一むの後継者が見つけられていないことである。国際高校につながる一むを広め、より多くの人々のスキルアップを可能にするため、私たちが卒業後も運営を続けていくためにも後継者がいなければ始まらないからだ。私はこれが1番重要な課題だと考える。その為、2年生のグローバルが生み出すゼミに声をかけることなど、何か対策を考えていかなければならない。またイベントごとの集客数が少ないことも問題である。来てくれた生徒も知り合いや同じ人など、まだまだつながる一むの知名度が低い。事前の告知方法やポスター制作など、これまでよりさらに工夫が必要になってくる。つながる一む存続のためにも様々な対策を検討しなければならない。

B) 多言語を活用したオンライン交流について

今年度は5カ国の高校生とオンライン交流をおこなったが、その中でも、交流が深まり姉妹校の締結に至ったものについて特記する。

サン・テレーズ高校 (Lycée Sainte-Thérèse) はフランス西部の町カンペール (Quimper) に位置する高校である。生徒は選択授業として日本語を選択することができ、現在は約50名の生徒が日本語を学習している。

今年度は2度のオンライン交流を、「つながる一む」等の教室を用いて実施した。さらに、2月にサン・テレーズ高校より訪問団が来校し、姉妹校協定の締結および生徒同士の交流を行った。

1 オンライン交流1回目 2022年6月8日(水)

今年度1回目の交流は、3年のフランス語選択者4名、2年のフランス語選択者のうち希望者4名が参加した。両校カメラを1台ずつ設置し、クラス全員での交流となった。簡単な言語表現を用いて身の回りのものを紹介することを目標に、「これは～です」という表現を使いながら奈良の名所や自分の好きなものについて話をした。

2 オンライン交流2回目 2022年12月1日(木)

2回目の交流は、3年のフランス語選択者4名、2年のフランス語選択者のうち希望者2名が参加した。1回目とは異なり、2回目は各自のiPadをZoomに接続し、グループに分かれて交流を行った。学習した表現を用いて、学校のスケジュール、好きな科目、将来

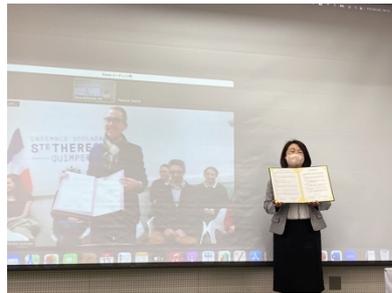
の夢、奈良について話すことを目標とした。少人数でお互いの文化について話すことができ、相互理解につながった。

3 クリスマスカードの交換（2022年12月～2023年1月）

オンラインによる交流だけでなく、今年度はクリスマスカードの交換をすることができた。本校生徒はフランス語を使って、サン・テレーズ高校の生徒は日本語を使ってカードを作成し、教員がとりまとめて発送した。

4 サン・テレーズ高校訪日団受入れと姉妹校協定締結（2023年2月13日～15日）

2022年2月13日から15日にかけて、サン・テレーズ高校の生徒15名と教員2名を受け入れた。サン・テレーズ高校の生徒たちは分かれてクラスに入り、日本の高校生活を体験した。放課後は本校生徒の家にホームステイし、それぞれの家庭での生活を体験した。また、2月13日には本校とサン・テレーズ高校の姉妹校協定調印式を開催した。オンライン会議を通して両校校長が協定書に署名し、姉妹校協定を締結した。



C) 生徒が主体となった地域との交流事業

実施日：2022年12月14日（水）15:00～16:30

内容：奈良韓国教育院の協力により、奈良市立登美ヶ丘小学校生の児童を対象に実施した。K-POPのダンス体験と、韓服の試着と伝統音楽体験の2つについて、奈良韓国教育院から講師を招いて実施した。企画と運営は本校の有志（コネチューニティー実行委員会）が担当した。実施に向けての話し合いは、「つながる一む」を使用した。

参加者：本校生徒10名、登美ヶ丘小学校生徒（4～6年生）13名、保護者7名

参加した児童の感想

- 難しかったけど、楽しくて面白かったです。ダンスはちょっとだけ習っていたので覚えられました。先生がおもしろくてよかったです。
- 友達と一緒にK-POPをおどれてうれしかったです。先生もおもしろくてわかりやすかったです。とても楽しかったので、3学期もやりたいなと思いました。

アンケートの結果、「今日の体験で、韓国の文化に興味を持ちましたか？」という質問に対し、すべての児童が「持った」もしくは「まあまあ、持った」という肯定的な意見を持った。



5. 研究の成果

- 本研究では、協働学習拠点「つながる一む」を設置し、3つの「C」を整備し、発展させた。これにより、生徒が協働的に学ぶ機会を設けることで主体的な学びを育み、問題解決能力を向上できると考える。また、「つながる一む」の設置と運営を、教員と生徒の対話を通じて行うことで、生徒と教員が協働する環境も整備できた。一方で、利用者アンケートを定期的実施することができず、効果と問題点を検証には至らなかった。今後は、「つながる一む」を発展的に継続する体制を構築する必要がある。
- 奈良県下すべての公立高校では、令和4年の新入生からBYODによる一人1台端末の活用が開始されている。一方で本校では令和2年よりBYOD 端末の活用を開始しており、令和4年度で、すべての学年でBYOD 端末利用の環境が整備された。本研究で得られる成果は、公開授業等で県内の教員、大学関係者、地域の方々、および保護者に公開することができた。BYOD 端末の利用方法を提示することができたと考えられる。
- 「つながる一む」に整備された機器を用いて、海外とのオンライン交流をスムーズに行うことができた。オンライン交流を繰り返すことにより問題点を明らかにし、スムーズな実施が可能になった。

6. 今後の課題・展望

- 「つながる一む」利用者アンケートを定期的実施することができず、効果と問題点を検証には至らなかった。今後は、「つながる一む」を発展的に継続する体制を構築する必要がある。
- 公開授業についての周知が十分でなく、多くの参加者を集めることができなかった。周知方法などを検討する必要がある。

7. おわりに

3年間にわたるパナソニック実践研究助成により、本校のICT環境が整備され、生徒や教職員のICT活用意識が高まった。今後は、この体制を維持しつつ、今回の研究で発掘できた生徒の主体的な学びと、それにより教員の姿勢をさらに発展させていきたい。

8. 参考文献

特になし